

高校  
実践事例  
2

観点② 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

探究の重要な要素を「探究の思考」に整理。  
希望進路の実現につながる力を育む

山形県立山形北高校

探究学習に力を入れてきた結果、総合型・学校推薦型選抜での合格者の割合は、年々増加。その手応えから、生徒の資質・能力をさらに育もうと、22年度は、探究学習の改善を図った。

生徒の成長を目のあたりにし、  
探究学習の重要性に気づく

2022年度大学入試において、山形県立山形北高校では、国立大学・公立大学の合格者数に占める総合型・学校推薦型選抜での合格者数の割合が約65%と、例年の約50%を上回った。その大きな要因は、1年次から取り組んできた探究学習にあると、19年度入学生生の学年主任を務めた鈴木佳徳先生は語る。

「生徒は1・2年次に、『自分で課題を設定↓情報収集↓整理・分析↓まとめ・表現』といった、いわゆる探究のサイクルを経験してきました。その中で、『探究の思考』

(P.22図1)を身につけた生徒は、志望理由書や面接練習で、大学・学部・学科の志望理由を、自分の学びを踏まえ、自分の言葉で語れるようになっていました。そのような生徒が大学入試で評価されたのだと捉えています」

同校が探究学習に力を入れ始めたのは、18年度のことだ。それまで学年主導だった「総合的な学習の時間」の運営を学校主導に切り換え、学年ごとに異なっていた活動内容を学校全体で統一し、1年次から探究学習に取り組みことにした。進路課主任の大内清輝先生は、その理由を次のように語る。

「今後増えていくであろう大学

入試における多面的・総合的評価には、単に教科学力を上げるだけでは対応し切れないのではないかという危機感がありました。志望理由書や調査書に書ける内容を増やさなければならぬと考え、着目したのが探究学習でした」

生徒の能力を伸ばしつつ、様々な入試に対応できるようにと始めた探究学習だったが、自分が探究した課題にもっと深く取り組める大学・学部はどこかといった視点で志望校を選ぶようになるなど、生徒の成長を目のあたりにし、生徒にとって探究学習は重要な学びであることを再認識したという。

「医療分野への進学を迷ってい

学校概要

設立 1928 (昭和3) 年  
形態 全日制/普通科(女子校)・音楽科(共学)  
生徒数 1学年200人  
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国立大学は、北海道教育大、宮城教育大、山形大、福島大、東京藝術大、新潟大、山形県立保健医療大、山形県立米沢栄養大などに70人が合格。私立大は、東北学院大、東北芸術工科大、東北福祉大、宮城学院女子大、東北文教大、法政大、武蔵野音楽大、洗足学園音楽大などに延べ163人が合格。



進路課主任  
大内清輝  
おおうち・きよてる  
教職歴22年。同校に赴任して6年目。国語科。



1学年主任  
鈴木佳徳  
すずき・よしのり  
教職歴34年。同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。



教務課  
柴田勝将  
しばた・かつまさ  
教職歴6年。同校に赴任して6年目。理科(化学)。

たある生徒は、3年生の時に、自ら医療従事者に連絡を取り、仕事の話や現場の課題について話を聞き、自分のそれまでの学びや培ってきた資質・能力と照らし合わせた上で、最終的に看護学部への進学を決めました。探究

学習で身につけた『探究の思考』を、自分の進路実現に生かしたのです。探究した分野と希望進路の分野が一致しない生徒もいます。探究学習を通じて身につけた情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などは、生徒の問題解決力を伸ばし、その結果、入試にもつながると捉えています」（大内先生）

1年次はグループ、2年次は個人で、探究のサイクルを回す

同校にとって探究学習初年度の18年度は、教務課主任や進路課主任、各学年主任が定期的に集まり、探究学習の内容を検討。活動計画ができたなら1学年団に渡し、随時実践するといった流れだった。常に慌ただしい状態ではあったが、1年間の議論と実践は、その後の組織的な取り組みの土台となった。19年度は、教務課や進路課、各学年主任、司書教諭、情報科の教師から成る「探究委員会」が授業計画を作成した（図2）。1年次は、地域の課題をテーマに、グルー

図1 「探究の思考」を軸とした「1年次に身につけてほしいこと」

1. 探究のサイクルを回すことで、「探究の思考」を身につける

- ①情報の収集（現状の把握。今はどうなっているか）
- ②課題の設定（現状を知った上で、何を問題とするか）
- ③実験・調査の計画（問題解決に向けて、どんなことを調査するか）
- ④実験・調査による検証（今までにない研究・活動のはず。実験やアンケートなどを行い、自分の手でデータを集める）
- ⑤データの分析・解析（データから分からないことをまとめる）
- ⑥解決策の提案（問題に対しての自分なりの方法を提案）

2. 各教科の力を伸ばし、探究につなげる

※学校資料を基に編集部で作成。

プで探究学習に取り組む。生徒は、自分の興味・関心を基に7分野から1つを選び、その分野で4人1組のグループを作る。そして、グループで探究のサイクルを回した上で、ポスターセッションによる最終発表を行う。指導は、1学年団の教師が中心となり、各分野を2人ずつで担当する。2年次は、探究のサイクルを個人で回すことを経験させるため、社会問題についての課題を自分で

図2 探究学習の内容

	活動内容	担当教師
1年次	<p>●グループ探究</p> <p>山形県、または県内市町村の課題を発見し、解決策を提案する。生徒は、自身の興味・関心に基づいて、A～Gの7分野の中から1つを選び、4人1組のグループで探究を行う。A食料・農業、B健康・福祉、C経済、D教育、Eジェンダー、F環境・エネルギー・技術革新、G国際・観光</p> <p>活動の流れ：①課題の設定、②調査活動、③中間発表、④発表の振り返り、⑤内容のブラッシュアップ、⑥最終発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1学年団の教師と、学年づきではない教師</li> <li>・A～Gの各分野を教師2人ずつで担当</li> </ul>
2年次	<p>●個人探究</p> <p>地域に限らず、社会問題についての課題を自分で設定し、解決策を提案する。</p> <p>活動の流れ：1年次と同様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2学年団の教師と、学年づきではない教師</li> <li>・教師1人あたり、生徒約14人を受け持つ</li> </ul>
3年次	<p>●個人探究</p> <p>大学での学びを見据えて課題意識や今後の展望を具体化するために、1・2年次に行った探究学習を踏まえて、大学・学部・学科研究や、小論文作成などを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3学年団の教師</li> </ul>

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

設定し、個人探究に取り組む。そして、3年次は、大学での学びを見据えて、課題意識や今後の展望を具体化するために、大学・学部・学科研究や、小論文作成を中心とした活動を行う。探究学習の指導に際しては、担当教師の配置を工夫した。質問等を通じて、生徒の興味・関心や疑問を引き出し、思考を深める支援をするファシリテーターに徹するため、探究委員会は、あえて担当教

科とは関連のない分野や課題に取り組む生徒を担当するように、担当教師を割り振った。自分の担当教科だと、つい生徒に答えや研究方法を教えたくなるからだ。探究のサイクルの中でも、生徒が最も成長するのは「調査」の場面だと、鈴木先生は語る。「調査では、社会問題の解決に取り組む人に、生徒が自分で連絡して約束を取りつけ、訪問して話を聞きます。課題設定をしたものの、

その課題がいま一つ自分事になっていなかった生徒も、当事者の生の声に接し、現状を知ること、問題意識が急速に深まり、探究学習に取り組む態度が変わります。また、そうした経験をすることで、新たに話を聞きたい人が出てきた時も、臆せず、自分から行動することができるようになります」

「探究の思考」を探究学習の軸に据える

22年度入学生の探究学習は、25年度入試を見据えて、19年度のカリキュラムをベースにしつつ、次のような改善を行った。

●「探究の思考」を生徒・教師間で共有

22年度入試で総合型・学校推薦型選抜の合格者数が増えた要因は、前述の通り、生徒が探究学習を通じて、情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などを身につけたことにあると考えた。そこで、探究の重要な要素を「探究の思考」(図1)として整理し、探究学習の軸に据えることにしたと、教務課で探究

委員の柴田勝将先生は説明する。

「年度初めに行う探究学習のガイダンスで『探究の思考』を示し、探究学習が目指すところを生徒や教師と共有しました。また、調査や実験には数学や理科の力が必要になるといった、『探究の思考』と教科学習の関係を示すことで、教科の授業への意識も高めました」

●山形県の現状を知る活動を導入

以前はガイダンス後、すぐに課題の設定に取り組ませていたが、県の現状をよく知らない生徒は、課題を見いだすことが難しかった。そこで、図書館がスクラップした新聞記事を活用し、県の課題を一通り俯瞰する場を設け、探究学習の流れを簡易的に経験させた。

●中間発表をスライド形式に変更

11月に行う中間発表は、プレゼンテーションソフトで8枚のスライドを作成し、それを基に発表する形式に変更する。

「以前の発表資料であるA1判のポスターには多くの情報を書き込めましたが、スライドでは要点を簡潔にまとめ、発表時に口頭で補足することになります。表現力

や発表力を育もうと、形式を変えました」(柴田先生)

中間発表では、大学や企業から招いた関係者に寸評してもらおう。生徒はそれを受けて再調査・再実験を行い、考察を深め、その内容をまとめて、3学期に行う最終発表に臨む。

「探究学習の評価は、昨年度までは、最終発表時のポスターを生徒が相互評価し、それに教師の評価を加える形で行っていました。今年度は、活動ごとにルーブリックを用いて評価する仕組みを確立しようとしています。また、生徒が毎授業書く振り返りは、生徒の次の学習につなげる形成的評価に活用する予定です」(柴田先生)

各教科・科目の授業にも探究的な学びを組み入れる

同校では、新学習指導要領の理念を踏まえ、各教科・科目の授業でも、生徒が実験や観察を通じて答えを見いだす活動や、生徒同士で議論し、他者の考えも踏まえて自分の意見をまとめる活動など、

生徒が自ら考え、問題解決に取り組む場面を設けている。

「本校の生徒を対象にした授業評価アンケートには、授業で探究的な活動が行われているかを聞く項目があります。学校の実践目標としても掲げられている『探究的な学習の推進』の到達状況を定期的に確認できるようにしています」(鈴木先生)

同校では、各大学による、25年度入試において課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、対応を検討中だ。例えば、国語は、22年度入学生の教育課程で、2年次に「文学国語」、3年次に「論理国語」を配置し、3年次に小説を扱わないことになる。そこで、放課後や長期休業時に補習を実施する予定だ。

「25年度入試の動向はもちろん注視していますが、大学入試で求められる力は、今後も根本的には同じはず。入試情報に必要以上を右往左往することなく、社会で求められる資質・能力を生徒に着実に育むために、探究学習や教科学習の改善に取り組んでいきます」(鈴木先生)